

令和元年 第8回教育委員会会議

1 日 時

令和元年7月25日(木)

開会 9時30分

閉会 10時19分

2 場 所

教育委員会室

3 出席者

田中新太郎教育長、金田清委員、横山真紀委員、眞鍋知子委員、西川恒明委員
新家久司委員

4 説明のため出席した職員

新屋長二郎教育参事、臼井晴基教育次長、堀田葉子教育次長、杉中達夫教育次長
塩田憲司教育次長兼学校指導課長、岡崎裕介庶務課長、中村義治教職員課長、
清水茂生涯学習課長、田村彰英文化財課長、村戸徹保健体育課長

5 議案件名及び採決の結果

議案第22号 石川県立高等学校の学科の改編について(原案可決)

議案第23号 石川県生涯学習審議会委員の委嘱(任命)について(原案可決)

6 報告案件

令和2年度石川県公立高等学校入学者選抜方法について

7 審議の概要

・開会宣告

田中教育長が開会を告げる。

・会議の公開・非公開の決定

議案第23号は人事に関する案件のため、地方教育行政の組織及び運営に関する
法律第14条第7項に基づき非公開とすることを、全会一致で決定。

・質疑要旨

以下のとおり。

議案第 22 号 石川県立高等学校の学科の改編について
(塩田教育次長兼学校指導課長説明)

それでは、資料 1 ページをお開きください。議案第 22 号について説明をいたします。

提案理由であります。令和 2 年度において、石川県立高等学校の学科等の改編等を行う必要があるためでございます。根拠法令は、記載のとおりです。

今回、付議いたします内容については、2 ページから 3 ページにかけて、お示ししてあります。また、今回の提案に至る経緯等を説明するための資料として、お手元に A3 縦で参考資料 1 として、付議する内容を含む、総合学科等の学科・系列等の一部改編（案）の全体像をお示ししたものです。それから、A3 横とじ込みで参考資料 2 として、公立高等学校（全日制）の総合学科および専門学科の現状をお示ししたものです。A4 縦で参考資料 3 として、総合学科および専門学科（商業・工業）等に関する調査結果をお示ししたものをお配りしております。

それでは、付議いたします内容をご説明する前に、「総合学科等における学科・系列の一部改編（案）」に至る経緯について、ご説明いたします。

初めに、総合学科の特色についてですが、総合学科は、普通教科を主に行う「普通科」、専門教育を主に行う「専門学科」に並ぶ第 3 の学科として、国において平成 6 年度に制度化されたものでございます。その特色は、カリキュラムの中に普通科目と専門科目の幅広い選択科目を開設し、その中から生徒自ら科目を選択し学習することが可能となっている点であります。具体的には、生徒は 1 年次の間は系列に分けず、普通教科の科目と必修科目「産業社会と人間」で将来の職業選択の基礎となる知識や系列分野の特徴を学んだ上で、自分の進路につながる系列を決め、2 年次よりそれぞれの系列に分かれて学習することになります。本県の全日制高校での総合学科の開設については、平成 7 年度の金沢北陵高校を皮切りに、平成 12 年度から 21 年度にかけて、高校再編の際に 8 校に導入し、現在に至っております。学校によっては 10 年から二十数年が経過し、生徒数の減少が続く中、系列の多すぎる学校では、一部系列の選択者が極端に少なくなっていたり、学年ごとの生徒数がここ数年にわたり 40 人以下となり、複数の系列を維持することが難しくなっているなど課題が生じていることから、学科や系列を整理・統合する必要が生じてまいりました。

こうした中、近年、地元企業や中学校の教員・保護者等から、総合学科について、「学科や系列の名称と学習内容が一部合っていないのではないか」、「同じ内容を学習しているのに、学校によって名称が異なり、分かりづらい」などの声が寄せられたところであり、昨年 11 月の産業教育審議会においても、同様のご意見を頂いたことから、昨年度後半から、学科・系列の在り方や名称等について学校と協議しながら、具体の検討を重ねてまいりました。

さらに、本年 4 月から 5 月中旬にかけて、各学校において、生徒が就職している主な地元企業や中学校の進路担当者等からニーズや意見を改めて調査・確認し、今回の改編案をまとめたところであります。

その主な意見については、お手元の A4 縦の参考資料 3 にまとめております。参考資料 3 をご覧ください。

(1) の総合学科および専門学科における系列名や学科名については、「学習内容が同じなら、名称は統一した方がよい」や「名称は学習内容等がイメージしやすいものにし

てほしい」「系列名や学科名からは、何を学習しているのか分からないものがある」などのご意見を頂いた他、(2)の総合学科については、「普通科と専門学科の内容のどちらも学べる利点がある一方で、中途半端な印象も感じる」とか、中学校の進路担当者からは、「総合学科の特色が中学生や保護者に伝わっていない」などのご意見を頂いたところであり、近年、県教委や学校に寄せられていた内容と同様の意見が確認できたところでもあります。

県教委では、こういった結果を踏まえ、専門高校の一部の学科等の名称の統一も含め、総合学科等の学科・系列の一部改編について最終案をとりまとめたところであり、今月22日に、改めて産業教育審議会に諮った上で、本日、学科の改編についてお諮りする次第であります。

それでは、具体の改編内容について、参考資料1と2でご説明したいと思います。

まず、参考資料1、A3縦のものですが、今回の改編内容をまとめたものになります。上段に総合学科等について、中段に商業科、下段に工業科について記載してあります。なお、赤字の部分が変更点であり、また、学科名の後ろに付いている丸数字は、現在の募集学級数を表しております。

参考資料2は、左列より、学校名、横書きとじ込みのものですが、参考資料2の方は左列より、学校名、学科・系列名とその概要、募集定員、3年間の志願倍率、在籍者数、進路状況、主な進路先について記載したものであります。また、例えば、横置き of 1 ページの中ほどにあります松任高校の欄をご覧ください。学校名の下に(普通科②)と書いてありますが、これは松任高校の場合、総合学科3学級の他に普通科2学級を併置していることを表しております。

それでは、続いて説明いたしますが、参考資料1にお戻りください。A3縦のもので

す。上半分にあります総合学科等について、一部改編に当たっての基本方針は、枠囲いの中にありますが、選択する生徒が少なくなっている一部の系列を整理・統合すること、系列の名称をできる限り統一すること、各学年の在籍生徒が総数40人以下となっている総合学科は廃止し、普通科のコースへ改編することといたしました。

具体的な改編ですが、初めに、中央の列の上から二つ目以降にあります志賀高校、輪島高校、飯田高校をご覧ください。この3校については、それぞれ総合学科への入学者数が40人以下になっている期間が、志賀高校の場合は平成23年から9年間、輪島高校は平成27年から5年間、飯田高校は平成24年から8年間にわたっており、今後見込まれる生徒数減少も考慮すると、二つの系列を維持していくことが難しくなっていることから、総合学科を廃止し、普通科のコースに改編いたします。

この3校の個別の状況につきましては、先ほどの横置きの参考資料2の2ページをご覧ください。2ページの上から志賀、輪島、飯田が記載してあります。例えば、志賀高校の在籍状況ですが、中ほどにある現在各学年とも約30人となっており、3年の福祉系列では選択者が10人を下回っております。また、下にあります飯田高校の在籍状況では、2・3年生がそれぞれ約30人となっており、さらに、商業系の系列を二つ開設しておりますが、それぞれの系列を選択する生徒が少ない状況となっております。こうした状況がございます。

では、参考資料1、縦置きの方にお戻りください。こうした状況であることから、志賀高校は、選択者が少なくなっている商業系列、福祉系列の2系列からなる総合学

科を、普通科のビジネス・福祉コースに、そして輪島高校は、どちらも商業系の系列である地域フロンティア系列、情報ビジネス系列からなる総合学科を、普通科のビジネスコースに、飯田高校は、同じくどちらも商業系の系列である地域ビジネス系列、会計ビジネス系列からなる総合学科を、普通科のビジネスコースに改編するものであります。

それでは次に、左側の列から中央列にかけて記載している、2学級以上の総合学科を持つ加賀、寺井、松任、北陵、津幡の5校をご覧ください。この5校については、選択者が少ない系列を整理・統合するとともに、学んでいる内容に合わせて系列の名称をできる限り統一いたします。基本的な枠組みとしては、大学等への進学を希望する生徒向けの系列を文系・理系を区別せずに「進学系列」、商業系の科目を学習して、主に就職する生徒向けの系列を「ビジネス系列」、に統一いたします。

なお、松任高校については、総合学科の他に、進学に対応する「普通科」が併置されていることから、総合学科の「進学系列」は廃止し、普通科に一本化することといたします。また、その上の寺井高校については、現在、「地域文化・芸術系列」を設置し、九谷焼と関連させながら絵画、陶芸、デザイン、石川の文化や歴史等について学習しているところではありますが、今回の改編に伴って、商業系の科目をしっかりと学習し、合わせて、引き続き地元の大切な伝統産業である九谷焼についても学ぶ系列とすることから、他の学校のように商業に関することを学ぶ「ビジネス系列」とはせず、「地域産業系列」という名称にいたします。

その他、各学校のビジネス・進学系列の他に、特色のある系列として、加賀高校、寺井高校、松任高校、北陵高校の4校については、介護・福祉・食物・被服・保育に関する進路に対応するために、既に設置している系列を「生活・福祉系列」の名称に統一いたします。また、寺井高校の中に「体育・健康系列」がございますが、この系列については、津幡高校のスポーツ健康科学科や鶴来高校の中にも普通科としてスポーツ科学コースがあります。それらの学校のように、スポーツ理論について学ぶ学習も取り入れ、体育系大学等への進学にも対応する系列として、「スポーツ科学系列」といたします。真ん中の上部に津幡高校がございますが、津幡高校の「花と緑系列」については、花や野菜の栽培の他、環境についても学ぶなど、園芸を中心に学習していることから、分かりやすくということで、「園芸系列」という名称に変更いたします。

その他の改編として、右側の列をご覧ください。七尾東雲高校の「総合経営学科」については、他の学校に合わせて「総合学科」に名称を変更するとともに、生徒数が減少していることから、開設している四つの系列を二つの系列、農業系列・ビジネス系列に整理・統合することとします。

また、その下の能登高校ですが、総合学科ではありませんが、専門学科に分類されている能登高校の「地域創造科」については、学んでいる内容に合致させ、分かりやすくするために、学科名を「地域産業科」、この「地域産業」は寺井高校の系列でも使っている名称ですが、これに変更するとともに、2年生からの選択コースとして、農業や水産に関して学習する「地域資源コース」については、県立大学や翠星高校でも使用している「生物資源」という名称を参考にして「生物資源コース」に、商業に関して学習している「商業コース」については、総合学科等の名称に合わせて「ビジネスコース」に変更することとします。

次に、参考資料1の下半分にあります、商業科と工業科について説明いたします。先ほどご説明したように、総合学科について、系列を整理・統合したり、学習している内

容に合わせて系列等の名称を統一したことから、今回の総合学科の改編に合わせて、商業科や工業科の名称についても同様に、学習内容と学校による名称のばらつきをなくすため、できる限り統一したいと考えました。

具体的には、商業科については、商業に関する学科を開設している県立高校3校のうち、小松商業、金沢商業は、募集定員が2学級以上で複数のコースを設定しております。情報およびビジネス等について総合的に学習していることから、現在、金沢商業で名称として使っている「総合情報ビジネス科」に統一することとします。なお、大聖寺実業高校の商業に関する学科「情報ビジネス科」ですが、学級募集が1学級でコース分けもないことから、「総合」を付けずに現状のまま「情報ビジネス科」としたいと思います。

次に、その下の工業科についてですが、県立高校に開設されている機械系の学科については、ほぼ同様の学習をしながらも、資料にありますように、電子機械科、機械、機械システム等、学校により名称にばらつきがあることから、分かりやすく「機械システム科」に統一することといたします。

また、右側にあります羽咋工業高校の「建設造形科」については、建築や土木、デザインに関して2年生から学習していることから、学科の名称を分かりやすく「建設・デザイン科」に変更することといたします。

総合学科等における学科・系列の一部改編（案）の説明は、以上でございます。

今回の改編は、来年度から実施することとなるため、夏休みに実施する中学生向けの体験入学等において、具体的内容を周知する必要があることから、本日、学科の内容についてお諮りする次第であります。議決いただいた後は、来年4月の実施に向けて、カリキュラムの編成等をしっかりと準備してまいりたいと思います。

それでは、最後に、今ほど説明いたしました改編案の中で、本日付議いたします学科の変更に関する部分について、改めて確認をさせていただきます。教育委員会会議の資料にお戻りください。2ページです。

1の総合学科およびその他の学科の改編について、志賀高校、輪島高校、飯田高校の3校については、「総合学科」を改編して、志賀高校は、普通科の「ビジネス・福祉コース」として、輪島、飯田高校は、どちらも普通科の「ビジネスコース」として募集をいたします。

七尾東雲高校については、「総合経営学科」の名称を変更して、「総合学科」として募集いたします。

能登高校については、「地域創造科」の名称を変更して、「地域産業科」として募集いたします。

2の商業に関する学科の改編についてですが、小松商業高校については、商業科の募集を停止し、学科の名称を変更して、「総合情報ビジネス科」として募集いたします。

資料3ページをご覧ください。3の工業に関する学科の改編についてですが、大聖寺実業高校、小松工業高校、羽咋工業高校、七尾東雲高校の機械系の学科である「電子機械科および機械科」については、4校とも学科の名称を統一して、「機械システム科」として募集いたします。

また、羽咋工業高校の「建設造形科」については、学科の名称を変更して、「建設・デザイン科」として募集いたします。

以上、ご審議をお願いいたします。

(田中教育長)

全体像について説明した上で、教育委員会会議に付議する案件は学科の改編ということになります。一部校種等については、教育長専決事項となっています。ただ、全体をご説明し、全体をご承認いただいた上で、学科の改編を後ほど採決させていただきたいということです。これまで学校へ求人はずっと継続し、採用していただいた企業の皆さんは、学校が何を勉強しているかは十分ご存じらしいのですが、この人手不足の中で、最近新たに学校に求人を出してきた企業の皆さんから、「あの学校はこういう名前だけれど、この学校と何か違うのですか」と。「だったら近くの学校に求人を出します」とか、簡単に言うとそういう話で分かりにくいとか、そういう話がたくさん寄せられたということが一つの話です。高校再編のときに学校の特色作りなどもあったのですが、これだけ人手不足になってくると、逆にそれが分かりにくいとか、そういうように変化をしてきたものですから、今回、一回整理をしたいということです。ただ、実際にカリキュラムを変えて学校がこういう中身でやりたいということで、特色のある名前に変えても、実態の中身がそれに合ってくれば、今後もそれぞれの学校の内容に合わせて、学科の名称を変えるということはあり得ます。それは否定するものではないので、そこは含みおきください。

【質疑】

(新家委員)

多分、本質論の質問ではないのですが、学科は普通科、総合学科等、その下のところに「系列」という言葉と「コース」という言葉が二つあるのですが、その違いを教えてください。

(塩田教育次長兼学校指導課長)

総合学科の場合ですと、一般に系列という名前を使って表現しています。それから、総合学科以外ですと、コースという言葉を使って表しているというのが一般的といえますか、石川県だけではなく全国的にもそのような状況で名前を使っています。

(新家委員)

多分そうだろうなと理解はしていたのですが、能登高校のところで、「地域産業科」というのは、私の理解でいうと、総合学科に近いかなと思うのですが、ここにコースと付いていますが、これはなぜでしょうか。

(塩田教育次長兼学校指導課長)

能登高校というのは、実は学科の位置付けで言いますと、総合学科の位置付けにはならないのです。それで系列という名前ではなくて、そこにあるようなコースという名前で表現しています。ただ、能登高校の場合は、誤解のないように確認をしておきますと、他の志賀高校、輪島高校、飯田高校は、入学の段階から普通科、普通コースのビジネスコースとして募集をしますが、能登高校の地域産業科の場合は、地域産業科で募集をして2年生から選択してコースに分かれるという形を取っています。

(新家委員)

大体、系列とコースの理解はしました。あと、カリキュラム的には大きな違いは何かあるのですか。

(塩田教育次長兼学校指導課長)

例えば、今回の見直しに当たって、志賀高校、輪島高校、飯田高校で総合学科の、特に輪島高校、飯田高校ですと、商業系の系列があります。そうすると、今、どのような状況になっているかということ、商業の科目が非常に多様に用意されていて、その中から選択しているという形になります。ただ、今回普通科のビジネスコースというように改編することで、ある程度商業の基幹となる科目は絞ろうと思っています。基幹となる商業の科目をしっかりと学ばせるということは引き続きやっていくということにして、あとは総合学科をなくすことで、先ほどの説明の中にありましたが、産業と社会という必修科目がやらなくてもいいことになりますので、そちらの方は、例えば普通教科の方に回すとかにして、これまでの商業の勉強もきちんとさせながら、普通教科の部分も基礎系をしっかりと勉強させるような、そういうカリキュラムを今、学校と一緒に考えているところです。

(田中教育長)

ちょっと補足しますと、多分、お分かりだと思いますが、再編のときに能登高校は水産高校と農業高校の2校を統合した経緯がありまして、要は、専門の学科を残して欲しいという非常に強い地元の意向があつて、総合学科という形を取らずに残したのです。「地域創造科」は何を勉強しているのかイメージが湧かないと言われ、中身を聞いたら水産と農業だったと。もうちょっと分かりやすくすればどうかと。そんな話もあった中で、総合学科にしないということで、一回地元とも話ができていますものですから、専門学科のままで名前は変えさせてくださいということで、今回お示しをしております。

(新家委員)

分かりました。

(横山委員)

私の方は、この三つの項目の工業科の名前の方で、この中の建設、デザイン、建築という、外見的には、建設という大きな中に建築、土木とかあるので、多分、このあたりすごく悩まれる部分だと思うのですが、羽咋工業が、「建築・デザイン科」となっておりまして、小松工業が「建設科」となっているのですが、ここはカリキュラムに違いがあるのか、もしくは羽咋工業でいくと、「建設・デザイン科」に入れば、建設コース、デザインコースのような形での学びができるものなのか、そのあたりを教えていただきたいのですが。

(塩田教育次長兼学校指導課長)

ここの名前は非常に難しいところなのですが、まず小松工業の「建設科」というのは、実は建築と土木の両方をやっていきます。それで、羽咋工業は「建設造形科」の中に1年生はみんな同じようなカリキュラムでやるのですが、2年生からはそれぞれ建築コース、土木コース、デザインコースの三つに分かれて、それぞれが分かれて勉強するとい

う形を取っています。それで、今回、羽咋工業の「造形」という名前については、地元
の中学生はある程度分かっているのですが、やはり周りから見ると、なかなか造形とい
うのがどういう学びかということが分かりづらいということで、あえてここは建設とい
うところ、改めてもう一回建設というのは土木と建築の両方が勉強できるものを表して
います。それからもう一つは、デザインを勉強する学科ですということを強調するため
に「建設・デザイン」としました。中黒を付けたのは、「建設デザイン」と一つに入れ
てしまうと、一つの言葉になってしまうような感じがして、そこは学校と調整をして、
では中黒を付けようかということで調整をした結果がこれです。

(田中教育長)

先ほどの、「生活・福祉」という、これも中ポツを入れているのは、家政系と福祉系
を一つにした系列にするのですが、選択科目でちゃんと福祉の科目もできるので、ここ
も中ポツで、並列っぽく表しています。あと、小松はデザイン専門にはあまり学んでい
ないということですね。

(塩田教育次長兼学校指導課長)

デザインはないです。

(西川委員)

意見ではないのですが、大変すっきりして分かりやすくなってきたと思うのですが、
最終的に私は調査の中にも書いてある、特色が中学生や保護者に伝わっていないという、
ここが一番大きな問題だと思っています。入った後で自分の思っていたことと違った結
果ドロップアウトするケースがよくあったわけです。今は体験入学とか説明会でどうい
ったことをやるのか。そして、先々どういうことになるのかという説明を各高校にきち
んと子どもたちに十分な説明をした上で選択してもらおうというような努力が大変重要
なのではないかと思います。改編の名称に関しては、私はすっきりしていいのではない
かと。過去はネーミングで受けて、機械、電子と付ければ、その当時子どもたちがどっ
ちかという。

(田中教育長)

新しく感じて、入学者が増えるのではないかと。

(西川委員)

私の時代は、繊維科とかあったけれど、デザイン科とかに変わってきたといういきさ
つがあるので、この辺ですっきりするのは必要なことかと思っています。

(田中教育長)

おっしゃるとおりなので、そういう議論もしてしまして、今回、この名称とか一部改
編をやったら、もう一回高校側は中学に説明をしっかりと丁寧に、聞きましたら「やって
います」と言うのですが、こういう機会があればもう一回きちんと、パンフレットも含
めて、体験入学ときの説明会のときにもう一回きちんと高校側も意識して説明し、逆に、
中学の進路指導担当者ももっと理解を深める機会にしていけないといけないという話

を実は私どもはしてしまして、その一つの機会にもなると。一番気になるのは、成績だけで「この成績だったら受かりそうなのはここここだから、その中から選んでください」というのは駄目だと。やはりキャリア教育というのはきちんと将来をイメージして進路を選ぶ、高校を選ぶ努力を中学校の進路指導ももっと考えてやらないといけない。その一つのきっかけにもなるので、これと合わせてそういうところも一緒に指導していこうと思っております。

(西川委員)

中学校にいたのですが、3年生に高校説明会をして、自分はここへ行きたいではある意味遅すぎます。そうすると、1年生、2年生の段階から、何か説明できるような手だてを、これは一遍には無理かなと思うのですが、そういうもので「では僕は、私はあそこへ行って学びたい」という思いを持った上で努力をしてもらおう。今、3年生になってということになると、今、教育長が言われたように、もう点数で切るしかないというようなことも出てくるのではないかなということで、3年間を通した努力というか、そういうものもあればいいなと思います。

(田中教育長)

おっしゃるとおりですね。特に中学校の進路指導ができていないから、早いうちから高校見学を入れるとか、そういうことも当然、企業体験とかもやっているの、それに合わせて高校の見学をするとか、そんなことももうちょっと強化していく必要があるのかと思います。多忙化の中でなかなか難しいところもあるのですが、どんな時間を使ってやるかは、また学校ごとに工夫してもらいたいなと思っています。

(西川委員)

師範塾も149人でしたか、定員を超えました。そのようにやっていって効果があれば、そんなふうが増えてくる可能性もあるので、ぜひその努力を続けていかなければいけないと思います。

(金田委員)

今言われたように、総合学科がやめていく中で、コアとなる産業と社会、ああいう科目の時数が減っていく中で、いわゆる総合学科の特徴であった少人数授業という、そういう教育課程が変わっていくわけで、そこをきちんとやはり先生方が理解していないと、総合学科がなぜできたのかという、導入された時代背景も含めて、変わる。私は変わったらいいいと思うのですよ。いつまでも過去にとらわれるのではなくて、時代の中で、教育課程も変わっていくべきだという考え方を持つのですが、これは非常にいい形で改革されていくなという思いでおるのです。ただ、そのときに学校の先生や校長が、教育課程を変えていくという意味を、具体的に言えば、少人数授業がなくなって、今度は大きなそういう授業の中で、授業に付いてこられないというか、興味、関心を持たない子どもをどのようにして持っていくかという、学校が問われたり、先生の技量が問われるような意味を含むのではないかと思います。ただ安易に少人数さえやれば、教育委員会は人を付けてくれる、先生を付けてくれる、そういう時代から変わったということ、多分、教職員課も含めて、アピールしていくべきだと思うわけで、ぜひこういう学科の名

前を変えると同時に、教育課程の中身も変わっていくのだというふうに発信していかれたらどうかなと思います。

(田中教育長)

ここはちょっと余談になりますが、本来なら、国も文科省も言っていますように、普通科でもっと特色作りをやっていこうという、四つぐらいの大きな教育に合わせて、そちらの方向にどうもかじを切っています。その根っこには、やはり総合学科がどんどん減って人気なくなっているという現実も全国的にもあるようです。現実には、生徒が減ってきた中で、先ほど意見聴取をした中にあったように、中途半端に見えるという意見があるようなのです。専門高校は今、これだけ人手不足の中で限りなく必要なのもっと増やしたらいいぐらいなのですが、逆にここは教員の確保が難しく、あるいは実習設備、実習施設が要るので、「来年から工業科を作ります」というのはなかなかいかないというところがあります。逆に言えば、進学の方はどんどん大学の無償化なんて話も出てきている中で、やはり高校はもっと普通教科の勉強をしっかりとやって、専門は大学でもいいのではないかというような、今は過渡期で、多分いろいろな議論がされていくのだと思います。

それと、この間の産業教育審議会が出た意見ですが、要は、もうほとんど AI、IoT 化してきたら、高校の工業科は何を子どもに学ばせるのかという、そこをもう一回根本的に考えないといけない時代が来るといった意見も出たのです。そうかといって、企業の皆さんに聞くと、最先端のことを高校で、中学の基礎系の学力の上いきなりそんなことをやっても無理だと。だから、基礎、基本形をしっかりと、例えば機械も手動で位置決めしてやるような、そんな原理をちゃんと実習で教えて欲しいと。ボタンを押したら製品が出てきた、そんな操作方法を教えてもらっても、機械の使い方を勉強するだけだったら学問にならない、という意見もあるのです。そうだけれど、実際高校でそういう原理原則の勉強を、今後 10 年、20 年たってもやるのかと。ちょっと違うのではないかと。実は産業界の委員からの意見もございました。そういうところも国も今からいろいろな意味で世の中が変わっていく中で、特に工業は顕著に変わっていくのではないかと。高校における工業教育は何を一体学習するのか定めて、何を基本に教育するのかということも今後検討するべきだといった意見も出て、もっともだと私も思いました。何かございませんか。どのように思っているのでしょうか。

(新家委員)

先ほど AI の話も出ましたが、AI をつくるのは人間なので、人間の根本的な能力は鍛えていかないといけない。よくうちの会社でもあるのですが、コンピューターが計算したから間違いはないというような、それはちょっと違うだろうと。お客さんに説明するとき、「これはコンピューターのソフトが計算しましたから」というのは、ちょっと違うなど。その基本的な理屈、それは高校で習うのか、大学で習うのかは別として、専門知識としては人間としてしっかりと基本的に学んでいないと、知識として頭の中に入っていないと、それは社会人としては役立たない。

(田中教育長)

そういう意見が実際、企業の皆さんから多かったのです。確かに、AI とかになって

くるとどうなのかというのは、それは肯定しているわけではないのですが、そういうことも議論すべきなのだと思います。電卓と暗算という話と一緒にですね。暗算は必要ないと、電卓があるのに、なんで暗算の勉強をするのだと。暗算なんか意味ないと。しかし、それでは元々人間が持っている能力が鍛えられないのですよね。そんな議論がどんどんこれからいろいろな面で教育の世界から出てくるのだろうなど。

世の中がどれだけ便利になって進んでも、人間の持っている能力なりを鍛えるというのが教育の基本なのです。特に義務教育ではそういうことなのだろうとは思いますが。

(金田委員)

企業が余裕がなくなっているのではないかと。みんな学校へ下ろしてくる。英語もしかり、AI もしかり。採用して自分の企業がこのようにして人を育てたいというようなことをやっている期間がやはり、かなり国際競争力を必要とする時代になってきているから。社員を鍛える、社員に投資していくという時間が、資金も惜しいのではないかと。だから、みんな学校へ、学校へという形で来ているのではないかと。学校はだから今、皆さんが言われたように、基本、基礎というような面で、どうしても入ってくる子ども、小学1年もそうだし、中1も高3も大1もそうだと思うのです。入ってくる子どもが、基礎、基本からきちんと持っていくというコンセプトを持っているときに、この時代にこれが必要なのだということで、安易にやはり学校へ投げ過ぎているのではないかなという気がします。企業がもう少し余裕を持って受け入れた子どもをその企業に合ったふう育てていくというようなことが、なくなりつつあります。

(新家委員)

その辺は時間もないですし、要は、即戦力が一番いいので、それはそういう面もあると思いますが、ただ、企業と言ってもいろいろ、機械を作っている会社でもいろいろな機械がお客さんによって違うわけですから、やはり企業の中で社員を育てるということをしていかないといけない。その辺を間違えてしまうと、要は会社もつぶれると思いますし、同じような話が、私はPTAをやっていましたが、要は家庭で教えないといけないことを小学校の先生に依頼する。その辺のところをやはり家庭と地域と企業と、いろいろな形の中で話し合っていないと、教育というのは、全部物事を背負ってしまったら、働き方改革でも何でもありません。本当は学校は何をしたらいいかというのを先生がしっかりと信念を持ってほしいと思います。

(田中教育長)

企業の皆さんにいろいろと意見を聞く中で、最近ちょっと変わりました。一時期は最先端の機器を入れて、高校で学ばせてくれとか、そんなことを言う企業が多かったのですが、これだけ人手不足が定着すると、反対に人間力を鍛えてくれと。専門的なことは会社に入ってから教えるから、心の強い子を送り出してくれという、最近はそのちの方が主流です。あまり専門的な最先端のことを学ばせてくれとは言わない、逆に極端な話だと、資格があればいいけれど、たくさん取るよりも心が強くないと意味がないという、そっちを鍛えて欲しいと。だから部活で鍛えられた子で、やる気のある子なら資格取得も専門的な勉強も会社に入ってからやってもらったらいからと、これは多分人手不足がこれだけ来ているから、そういう意見も出る。一時期は、逆に何でもかんでも学校で

教えて欲しいという雰囲気がありましたが、最近はちょっとそこは企業も意識が変わったと思います。

(金田委員)

そうであればありがたい。学校の先生が分かりやすいと思います。

(田中教育長)

採決を行う。

(各委員)

異議なし。

報告事項 令和2年度石川県公立高等学校入学者選抜方法について
(塩田教育次長兼学校指導課長説明)

それでは令和2年度公立高等学校入学者選抜方法について、ご報告いたします。資料6ページをお開きください。

初めに1の推薦入学について、ご説明をいたします。まず、(1)の推薦入学実施校ですが、アに示しました全日制の普通科で推薦を実施するのは、前年度同様、ご覧の8校です。

また、イに示しました全日制の普通科におけるコース、専門学科および総合学科で推薦を実施するのは、ご覧の20校であり、前年度からの変更としては、志賀高校の1校が推薦入学を取りやめております。また、ウの定時制については、推薦入試の実施校はございません。

次に、7ページをお開きください。(2)の推薦入学の推薦枠および検査科目をご覧ください。先の教育委員会会議でご審議を頂き、決定された入学者選抜方針では、推薦枠について、コースを除く普通科は20%以内、普通科におけるコース、専門学科および総合学科は、25%以内となっております。その選抜方針を受け、各学校において、志望動機がより明確で、適性、興味および関心がより高い者を選抜し、学校の活性化を目指して推薦枠を設定したものでございます。推薦入学を取りやめた志賀高校以外は、前年度からの変更はございません。

次に、8ページをお開きください。(3)の推薦要件であります。アの「普通科の推薦入学」実施校につきましては、昨年度と同様となっております。県が定める推薦要件として、aの「推薦にふさわしい学力を有すること」、bの「当該高等学校が定める推薦要件を満たすこと」が入学者選抜方針で規定をされております。

それを受けて、推薦入学を実施する学校からの推薦要件を8ページから9ページにわたって示しております。各学校の様子を見ますと、多少表現の違いはありますが、それぞれの推薦要件を集約しますと、目的意識が明確であることや、部活動で優れた実績、資質があること。あるいは生徒会活動、ボランティア活動等で、顕著な活動があったなど、多方面で学校の活性化に寄与できる人物を推薦入試で求めていると言えると思います。

次に、9ページをご覧ください。イの「普通科におけるコース、専門学科および総合学科における推薦入学」の実施校につきましては、県が定める推薦要件を、aの「志望する動機、理由が明確かつ適切であること」、bの「適性、興味および関心を有すること」、cの「調査書に優れた点や長所の記録を有すること、または当該高等学校が定める推薦要件を満たすこと」と示してございます。このうち、cの「当該高等学校が定める推薦要件」については、定めている高校はありません。

次に、10ページをご覧ください。2の一般入学についてです。(1)の一般入学の学力検査以外の検査科目について、全日制課程の学校、定時制課程の学校とも、それぞれ一覧表に記載されているとおりとなっております。なお、面接および適性検査のいずれも実施しない学校は、例えば、小松高校、金沢泉丘高校、七尾高校など13校となっております。前年度からの変更はございません。その下の(4)傾斜配点実施校は、前年度同様ありません。

以上で、令和2年度石川県公立高等学校入学者選抜方法についての報告を終わります。

す。

【質疑】

質疑なし。

(田中教育長)

以降の審議は非公開となるため、傍聴人の退席を促す。

議案第 23 号 石川県生涯学習審議会委員の委嘱（任命）について

清水生涯学習課長が説明し、採決の結果、全会一致で原案のとおり可決された。

- ・ 閉会宣言

田中教育長が閉会を告げる。